様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　5 月 20 日現在

機関番号：32623
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520666
研究課題名（和文）南シナ海を渡った人々：土器の比較研究からみた鉄器時代のベトナムとフィリピンの交流
研究課題名（英文）Ancient human dispersal across the South China Sea: viewed from a comparative study on the Iron Age pottery of Vietnam and the Philippines
研究代表者
山形　眞理子（YAMAGATA MARIKO）
昭和女子大学・国際文化研究所・研究員
研究者番号：90409582

研究成果の概要（和文）：平成 21 年度にベトナム中部・ホアジェム遺跡の第二次発掘調査を行った。カムラン湾岸に位置する鉄器時代埋葬遺跡である。この遺跡で甕棺墓に副葬される土器群は、フィリピン中部カラナイ洞穴、タイ南部サムイ島出土土器と酷似する。考古学的な考察から土器の年代は紀元後 2～3 世紀と推定され、埋葬人骨の放射性炭素年代もそれを裏付けた。東南アジアに国家が出現する時期、南シナ海を渡って交流した人々の存在が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The second excavation was carried out at the Iron Age burial site of Hoa Diem, central Vietnam in 2010. The funerary accessory pottery associated with burial jars at Hoa Diem shows the striking similarity to the pottery found at the Kalanay Cave in the central Philippines and on the Samui Island in southern Thailand. Archaeological study made us believe that those ceramic vessels should be dated back to the 2nd and 3rd century AD, as it was also verified by the C14 date of a human tooth found in a jar burial. Thus, the interaction beyond the South China Sea took place during the period of the first state formation in Southeast Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：考古学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：考古学、ベトナム、フィリピン、南シナ海、土器、甕棺墓、胎土分析、古人骨

１．研究開始当初の背景

(1)本研究を開始した当初の背景として、まず､研究代表者とそのチームが 2007 年 1 月、ベトナム中部・カインホア Khanh Hoa 省カムラン Cam Ranh 市ホアジェム Hoa Diem 遺跡にて実施した発掘調査をあげることができる（平成 18～19 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「環南シナ海先史時代の交流に関する基礎的研究」課題番号 18520593 による）。出土遺物の整理と分析が進み、その成果をベトナム人共同研究者とともに国際学会で発表したことを契機に、遺跡がベトナム国内外の考古学者から注目されるようになった。ベトナム側にホアジェム遺跡共同発掘を申し出る外国の大学があり、越・日と併せた三国の共同研究へと展開する可能性がでてきた。

(2)欧米の研究者がホアジェム遺跡に注目した理由は、ホアジェムの甕棺墓に副葬された土器がフィリピン中部マスバテ島カラナイ Kalanay 洞穴出土土器と同型式に属するからである。1950 年代にハワイ大学のソルハイム教授によって発掘されたカラナイの土器群は特異なものであったが、酷似する土器がタイ南部サムイ島からも出土していることを教授自身が突き止めた。しかし両遺跡は南シナ海とタイ湾をはさみ遠く離れているため、その類似は等閑視されてしまった。半世紀を経て、両遺跡の中間に位置するベトナム中部のホアジェムから、甕棺に副葬される形でカラナイと同種の土器群が出土したのである。これは大海を渡って航海した人々の存在を示す証拠であるといえる。

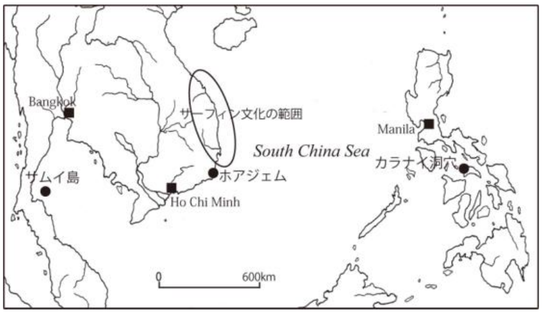

図 1　ホアジェム遺跡の位置

(3)さらに、オーストラリア国立大学のベルウッド教授が主導するオーストロネシア語族の拡散仮説との関係がある。ベルウッド教授は前 1500 年から前 500 年の間に、オーストロネシア語を話す人々の一派が東南アジア島嶼部を離れ、南シナ海を越えてベトナム中部に到達したと考えている。フィリピンとの強いつながりを示すホアジェムは、オーストロネシア語話者の到来を示す証拠となるかもしれない。ベルウッド説には必ずしも賛成できないが、オーストロネシア語話者の島嶼部から大陸部への移動という問題は、東南アジア先史考古学の重要な課題である。そこで、オーストロネシア語族の拡散仮説を視野にいれながら、ホアジェム遺跡の再調査に進む必要があると考えた。

２．研究の目的

(1)本研究は、ベトナム中部カムラン湾岸に位置する鉄器時代埋葬遺跡ホアジェムから、フィリピン中部の洞穴遺跡カラナイと酷似する土器が出土したことを出発点とする。南シナ海を越えて島嶼部からインドシナ半島東岸に到達した人間集団がいたとするならば、それを考古学的にどのように把握できるのか、探求しようとした。

(2)ホアジェム遺跡の再度の発掘調査を通して、以下の諸点を明らかにしたいと考えた。
①初期の居住の年代：墓葬に先行する遺物包含層の年代を知りたい。オーストロネシア問題はホアジェムの甕棺墓ではなく、遺物包含層を残した人々と関係するかもしれない。
②墓葬の年代：カラナイ土器が副葬される甕棺墓の年代を後 2 世紀以降と推定していた。これを裏付ける証拠を見出したい。
③遺跡の範囲の特定：ホアジェム遺跡の拡がりを把握したい。
④人類学的な系統：2007 年までにホアジェム遺跡で出土した人骨の分析によれば、島嶼部集団との類似性が高い。集団としての特徴を引き出すために、人骨資料を増やしたい。
⑤土器群の位置づけ：ホアジェム遺跡出土土器と、ベトナム中部のサーフィン文化、南シナ海対岸のフィリピンの土器との比較研究をおこなう。それによってホアジェムの土器がカラナイ土器コンプレックスの一部であることを明らかにしたい。さらに、胎土分析を通してホアジェムの土器の特徴を明らかにしたい。

３．研究の方法

(1)発掘調査
ホアジェム遺跡において再度の発掘調査を実施した。前回の発掘区の周辺を掘り下げ、さらなる墓葬の検出を目指した。さらに、墓域と遺物包含層の分布について知るために、複数のテストピットをあけた。

(2)関連資料の探索
フィリピン国立博物館にてカラナイ洞穴出土土器の調査を行った。ベトナム中部各省博物館を訪ね、サーフィン文化遺跡出土土器を観察し、資料をデータ化した。

(3)古人骨の形態に関する分析
研究分担者・松村博文が遺跡出土人骨の整理と分析を担当。歯冠計測値と歯のノンメトリック形質による系譜分析を実施した。

(4)胎土分析
研究分担者・鐘ヶ江賢二が蛍光 X 線分析と岩石学的分析を実施した。

(5)ガラスビーズの化学成分分析
副葬ガラスビーズの分析を飯塚義之氏（台北の中央研究院地球科学研究所）に依頼した。

(6)放射性炭素年代測定
出土サンプルを日本に持ち帰り、（株）加速器分析研究所にて AMS 年代を測定した。

４．研究成果

(1) ホアジェム遺跡 2010 年発掘調査
①発掘調査の経緯
発掘期間：2011 年 3 月 1 日～3 月 20 日

共同調査機関：南部持続可能発展院、カインホア省博物館
発掘調査参加者：
＜ベトナム＞Bui Chi Hoang（調査団長）、Nguyen Kim Dung, Nguyen Lan Cuong, Nguyen Tam, Nguyen Khanh Trung Kien, Dang Ngoc Kinh
＜日本＞山形眞理子、俵寛司、田中和彦、松村博文、鐘ヶ江賢二、久保純子、渡辺慎也、石井彩子、深山絵実梨、鈴木朋美、加藤南、田中克哉、直井麻弥
＜台湾＞劉俊昱

②発掘地点

2010 年発掘調査では、2007 年に発掘した地点とは別に、そこから 200m ほど南東に位置する地点でも試掘を行った。前者をホアジェム 1 遺跡（HD1）、後者をホアジェム 2 遺跡（HD2）と名付けた。

③ホアジェム 1 遺跡の概要

この遺跡の状況は 2007 年と変わりなく、廃屋となった旧公会堂の建物を中心に、草地が拡がっている。ウシの放牧地として利用されている。遺跡周辺は塩田である。

2007 年発掘区（07HDH1、面積 48 ㎡）のグリッドシステムを遺跡全体に拡げることとした。すなわち、2007 年発掘区の北コーナーA1 グリッド（2m 四方）を基点とし、南東方向に A2, A3, A4, A5, …、南西方向に B1, C1, D1, E1, …とナンバーリングした。

2007 年発掘区と,それに隣接する 2010 年発掘区 3（10HD1H3）で観察された層序は以下の通りである。この地点では地表下 60～70cm で地山に達する。

I 層：表土、厚さ 15-20cm、灰黄褐色のしまりの弱い砂

Ⅱ層：文化層 1、厚さ 15-35cm、黒褐色、比較的しまりのよい砂層。甕棺墓はこの層から掘り込まれている。土器、貝、動物骨からなる遺物のクラスターを含む。

Ⅲ層：文化層 2、全体の厚さ 20-55cm、おおむね上下二層に分けることができる。

Ⅲ-1 層：黒褐色のしまりのよい砂層、土器片や動物骨を含む貝層が分布する部分があり、それが甕棺墓によって切られている。

Ⅲ-2 層：灰黄褐色砂層、しまりがよくきめ細かい砂層、少量の土器片、貝、炭化物を含む。

Ⅳ層：地山、にぶい黄褐、きめ細かい砂層

07HDH1（面積 48 ㎡）では甕棺墓 14 基と伸展葬 2 基が検出されていた。この墓域の拡がりと、墓に切られていた貝層（貝層を含む遺物包含層）の範囲を特定する目的で、以下のような発掘区と試掘区を設置した。

発掘区 1（2010HD1H1）: B15,C15,D15 グリッドにあたり、面積 12 ㎡。2007 年発掘区との距離は 20m。

発掘区 2（2010HD1H2）：J5, J6,J7,J8 グリッドにあたる。もともと 2002 年にベトナム考古学院が発掘したトレンチの範囲を確認するために表土を剥いだところ、J5,J6 グリッドで旧トレンチの境界を確認した。発掘区 2 は発掘区 4 とは 2m 隔たっているが、発掘区 4 で見られた貝層は確認されなかった。

発掘区 3（2010HD1H3）：D1, D2, D3, D4, E1, E2, E3, E4 グリッドにあたり、発掘面積は 21 ㎡（E 列のグリッドは半分のみ発掘）。この発掘区は 2002 年考古学院発掘区と 2007 年発掘区の間に位置する。西側の D1, D2、E1, E2 グリッドから 5 基の甕棺墓 M1～M5 が検出された（図 2）。すべての甕棺内部より人骨が出土した。人骨残存状況が非常によかったのが M4 で、球形甕棺のなかに成人男性 1 人が埋葬された。M2 は出土した歯の分析によると 2 体合葬で、五銖銭 1 枚が出土した。他に甕棺内に副葬される遺物として鉄器、ビーズ（ガラス、メノウ、水晶）、青銅製ボタンがある。

図 2　発掘区 3 の甕棺墓：左手前より M4,M5,M2,右 M3

発掘区 4（2010HD1H4）：F7, G7, H7, F6, G6, H6 グリッドにあたり（ただし 6 列のグリッドは 2/3 のみ発掘）、発掘面積は 21 ㎡。2002 年考古学院発掘区のすぐ東に位置するが、墓は出土しなかった。厚さ約 10cm の表土を剥ぐとただちに土器片と動物骨を含む貝層の拡がりが確認された。貝層の厚さは約 20cm。

さらに、遺跡の範囲と遺構の分布を確認する目的で K11, K15, O11, O15 グリッドを試掘した。その結果、K15 と O15 で甕棺墓が発見されたため、K15 グリッドの周囲で K14, L14, L15 の一部、O15 に隣接する P15 の一部に試掘範囲を拡大した。

図 3　復元された K15M1 甕棺

試掘区 K15（2010HD1K15）：甕棺墓が集中した 2007 年発掘区から南へ約 25m 離れた地点で、思いがけず甕棺墓が出土した。K15 グリッドを中心として試掘面積 9 ㎡の範囲より甕棺墓

3基を検出した。このうちM1とM2は棺体として利用された土器が、従来知られていないタイプであった（図3)。ただし副葬土器は典型的なカラナイ土器コンプレックスで、球形甕棺に伴う土器群と同じである（図4)。

図4 K15M1甕棺墓の副葬土器

試掘区015P15グリッド:K15グリッドから南西に6m隔たっている015グリッドを試掘したところ、P15グリッドとの境界に甕棺墓が確認された。球形甕を棺体とする甕棺墓1基で、人骨も残っていたが攪乱されている。特徴的な鉄剣1点が副葬されていた。

④ホアジェム2遺跡の概要

周囲の塩田との比高差1.0mほどの段丘上が現代の墓地として利用されており、土器片が濃厚に散布している。段丘縁辺部に何らかの目的で掘られた土坑があり、それを拡げる形で試掘区1とした（10HD2TS1、1x2m)。それとの間に50cmの間隔をあけ、南側に試掘区2を設定した（10HD2TS2)。

TS1では地表下約80cmの深さから頭蓋骨が出始め、成人男性の伸展葬であることが確認された（10HD2TS1M1)。現代の墓があるため人骨全体を出すには至らなかった。副葬遺物はなかった。TS2では地表下約20cmの深さで貝層が出現した。TS2の堆積はすべてフルイ選別をおこない、貝層については一部をサンプルとして取り上げ貝の混入率を求め、水洗選別をおこなった。貝種についてはカインホア省博物館から地元ニャチャン市の海洋博物館に問い合わせ中である。TS2では地表下約70cmより幼児の伸展葬が検出され、9点の青銅製小鈴、1個の青銅製垂飾板が共伴した（10HD2TS2M2)。

(2)古人骨の形態に関する分析

松村博文は甕棺墓と伸展葬の人骨9体の頭骨と歯の形態学的データを採取し、2007年以前に出土した人骨データとも合わせ生物統計学的分析を行った。ホアジェムの人々は東南アジア先住集団の系譜に属さず、中国からの影響が大きいとみられる他の東南アジアや中国南部の集団に近いことが明らかになった。ただし北のドンソン文化とは異なり、島嶼部の東南アジア人に近い。2010年出土人骨の概要は以下の通りである。

試掘区015P15グリッドM1甕棺墓（10HD1015P15M1)：埋葬人骨全体の輪郭はわかるが残存状況はよくない。成人男性。

発掘区3・M1甕棺墓（10HD1H3M1)：歯が数本と手足の骨が断片的に残るのみ。若い男性、14～25歳。

発掘区3・M4甕棺墓（10HDH3M4)：非常に残りがよい若い男性、18～25歳。一次葬。

発掘区3・M5甕棺墓（10HD1H3M5)：人骨の破片数点のみ出土。少年か。性別不明。

発掘区3・M3甕棺墓（10HDH3M3)：人骨の残存状況はよくない。幼児か。

発掘区3・M2甕棺墓（10HDH3M2)：2人の合葬。歯と手足の骨が断片的に残るのみ。1人は4～6歳の幼児、1人は12～18歳、いずれも性別不明。

ホアジェム2遺跡試掘区1・M1墓（伸展葬）（10HD2TS1M1)：残りがよい30～40歳男性。頭蓋骨はもろいが一部を除いて残存していた。抜歯が確認され、施行されている歯種は両側の上顎犬歯と、左側の上顎側切歯1本。大腿骨全長をもとにした推定身長は145.5cmと比較的低身長。

ホアジエム2遺跡試掘区2・M1墓（伸展葬）（10HD2TS2M1)：幼児の伸展葬、4～6歳。

(3)胎土分析

日本に持ち帰ったサンプルは33点である。内訳は甕棺（棺体）13点、蓋（棺体）7点、副葬土器8点、グリッド出土3点、ソムコン遺跡（同じ地域の新石器時代遺跡）の土器2点である。鐘ヶ江賢二・棟上俊二が分析をおこなった。

蛍光X線分析：ホアジェムの甕棺には繊維の混和が多く認められ、それらは胎土に大粒の砂粒を含まず、シルト～粘土質の緻密なマトリクスから構成されている傾向がある。同じ墓の上下棺（甕棺とその蓋）の胎土は元素の分布が異なり、甕棺と蓋がセットで製作されたわけではないことが示唆される。同一遺構で甕棺と副葬土器の化学組成が全く異なる場合があり、棺と副葬土器では生産体系が異なっていた。ソムコン遺跡の土器2点は明らかに材料採取地が異なる。

偏向顕微鏡による岩石学的分析：含繊維土器では植物の組織が残存していた。偏向顕微鏡による観察によると、ホアジェム出土土器は鉱物組成に若干差異はみられるものの、概ね花崗岩類を基盤とする地質構造をもつ地点から材料が採取された。土器製作のための材料は深成岩の分布する地点から採取されたものと推測される。

遠隔地からの搬入をうかがわせる異質な個体は見いだされなかった。フィリピンとの関係については、フィリピンには活火山が分布しており、土器の鉱物組成として火山ガラス等が含まれることが想定される。しかしホアジェムの胎土中から火山噴出物に由来するような鉱物は確認されなかった。

今回分析対象となった土器については、ホアジェム遺跡周辺で材料が採取され、製作さ

れた可能性が高い。

(4)ガラスの成分分析

飯塚義之は走査型電子顕微鏡を用いたガラス玉断面の観察とエネルギー分散型 X 線分析法による化学分析を実施した。10HD1H3M3 出土青ガラス玉はカリガラス、07HDH1M7 出土緑色ガラス玉はソーダ鉛ガラスで内部に錫ー鉛合金の solder（はんだ）が認められ、ガラス作りの溶剤として使われたらしい。07HDH1 グリッド出土の青色ガラス玉はソーダカリガラス、07HDH1M3 出土の透明ガラス玉は鉛ガラスと判別された。

(5)放射性炭素年代

ホアジェム遺跡で現在までに測定された放射性炭素年代は以下の通りである。

	測定番号	14C Age (yrBP)	Calibrated Age（2σ）
1	PLD-8335	2445±25	760BC-680BC(25.1%) 600BC-630BC(8.5%) 600BC-400BC(61.8%)
2	PLD-8336	2970±20	850BC-740BC(95.4%)
3	IAAA-101437	1840±30	90AD-102AD(2.2%) 123AD-243AD(93.2%)
4	IAAA-101438	2650±30	888BC-881BC(1.1%) 841BC-789BC(94.3%)
5	IAAA-101439	2630±30	834BC-787BC(95.4%)
6	IAAA-100714	2100±30	200BC-49BC(95.4%)

（試料 1:07HD1H1C1 炭化材、試料 2:07HDH1C3 海産貝、試料 3：10HD1H3M4 甕棺内埋葬人骨の歯、試料 4：10HDH3D2 甕棺 M3 脇出土炭化物、試料 5：10HD2TS1 伸展葬に先行する層位より出土した炭化物、試料 6：10HD2TS1M1 伸展葬人骨の歯）

これらのデータは、ホアジェムの遺物包含層の時期が前 800 年ころ、ホアジェム 2 遺跡の伸展葬が前 2 世紀〜前 1 世紀、そして甕棺葬が後 2 世紀〜後 3 世紀に属することを示唆している。つまり、ホアジェム遺跡には少なくとも三段階の形成時期がある。

(6)調査成果のまとめ：南シナ海を越えた鉄器時代の交流

2009 年 8 月に山形眞理子と田中和彦がフィリピン・マニラ国立博物館を訪れ、カラナイ洞穴出土土器を調査した。しかしカラナイ出土土器は数点しか所蔵されていないことが判明した。米国から返還されていない可能性が高い。ベトナムではサーフィン文化の副葬土器とホアジェムの比較研究をおこなった。ホアジェムの副葬土器はベトナム中部にありながら、サーフィン文化の土器とは異なる。カラナイ土器コンプレックスに属する土器群と理解されるべきである。しかもカラナイとサムイの土器のほうが、ホアジェムよりも古い特徴を含んでいる。カラナイ土器コンプレックスの動きに限って考えるならば、フィリピンからベトナムへという流れが考えられる。しかし環南シナ海地域をまきこんだ多方向的な交流のなかに両遺跡を位置づけるほうが、妥当な解釈だと考えている。

今回の調査でホアジェム遺跡の年代をかなり明らかにすることができた。遺物包含層（貝層を含む）は前 800 年ころの居住者が残した可能性が高いが、前 9 世紀から前 8 世紀に属すると認められる遺跡は、環南シナ海地域では多くはない。ベトナム中部では青銅器時代のクァンガイ省ビンチャウ遺跡がこの年代に近いかと思われる。オーストロネシア語族の拡散仮説にとっては意味がある年代である。ただしホアジェムの貝層出土土器（主な文様は貝殻腹縁紋）は他遺跡に類例がなく、その位置づけは不明である。

甕棺墓群の年代すなわちカラナイ土器コンプレックスの年代がサーフィン文化よりも新しく、後 2〜3 世紀ではないかという仮説は、甕棺出土人骨の測定年代によって裏付けられた形となった。今後のさらなる検証作業が必要となる。

初期国家扶南との関係を示すものとして、ホアジェムの甕棺墓に副葬される器台がある。非常によく似た土器がメコンデルタのオケオ遺跡やアンコール・ボレイ遺跡から出土している。前者は扶南の港、後者は王都とされる遺跡である。

ホアジェム遺跡の調査から、南シナ海を舞台として先史時代から初期歴史時代に繰り広げられた、多方面の交流が見え始めている。

(7)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

ホアジェム遺跡の二次にわたる発掘調査成果を東南アジア考古学者ヨーロッパ協会、インド太平洋先史学協会の大会で発表したところ、「東南アジア考古学には今でも、これほど驚かされる発見があるのだ」という感想をいただいた。私たちの調査でフィリピン、ベトナム、タイ南部を結ぶコネクションが浮き彫りとなったが、その年代が後 2〜3 世紀に絞られてきたことは重要である。それは中国文献に東南アジアの初期国家が登場する時代である。土器の比較研究にもとづくならば、ホアジェムよりもカラナイとサムイの土器群のほうが古い段階を含む。それにもとづいて人間集団の移動の方向を特定することは難しいが、鉄器時代に大海を往来した人々

がいたことは確かである。それが前1世紀には盛んになっていたインドと漢を結ぶ南海交易、そして後2世紀から中国文献に登場する初期の国家扶南や林邑とどう関係するのか、興味は尽きない。

ホアジェムの甕棺墓群の年代を考慮すると、それをオーストロネシア語話者の最初の到来と結びつけて解釈することはできない。ただしホアジェムの最初の居住は前800年ころにさかのぼる可能性が高く、それはオーストロネシア語族の拡散仮説と関連する可能性もある。今後の研究課題となる。

2010年発掘調査の整理作業は現在も進行中である。とくに動物骨の同定と分析は、日本の専門家にお願いして着手したばかりである。2012年を目途にこの遺跡の報告書を英語、日本語、ベトナム語の三カ国語で刊行することをめざしている。

なお、ホアジェムの調査に関心をよせたタイ人とフランス人のチームが2010年、サムイ島でカラナイ類似土器を出した遺跡を特定した。彼らがその遺跡を発掘する際には、私たちのチームからも何名か参加予定である。このように共同研究の可能性が広がっている。さらに、ホアジェムの特異な埋葬習俗自体についても研究を深める必要がある。甕棺内への複数遺体の埋葬、一次葬と再葬の問題など、日本列島の再葬墓や甕棺墓の研究を活かすことができる分野である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計15件）

①Mariko Yamagata and Nguyen Kim Dung 2010 Ancient Roof Tiles Found in Central Vietnam. Bérénice Bellina, Elisabeth A. Bacus, Thomas Oliver Pryce and Jan Wisseman Christie (eds) *50 Years of Archeology in Southeast Asia: Essays in Honour of Ian Glover.* River Books, Bangkok: 194-205. 査読有

② Matsumura Hirofumi, Domett, K. and O'Reilly, D. 2010 On the origins of pre-Angkorian peoples: perspectives from cranial and dental affinity of the human remains from Iron Age Phum Snay, Cambodia. *Anthropological Science* 2011.119, 67-79. 査読有

〔学会発表〕（計22件）

①山形眞理子、「オーストロネシア仮説と環南シナ海地域の考古学」、第64回日本人類学会伊達大会シンポジウム「東南アジア・オセアニア地域の人類集団の移住史」、2010年10月2日、北海道・伊達歴史の杜カルチャーセンター

② YAMAGATA Mariko, Comparative study between Sa Huynh and Sa Huynh related pottery in Southeast Asia, The International symposium on 100 years - discovery and research of Sa Huynh culture, 22-24 July 2009, Quang Ngai Provincial Museum, Vietnam.

③山形眞理子・田中和彦・俵寛司・Bui Chi Hoang、「環南シナ海地域の鉄器時代甕棺葬」、日本考古学協会第75回総会研究発表、2009年5月31日、早稲田大学

④YAMAGATA Mariko, Bui Chi Hoang, Revising Sa Huynh－Kalanay Pottery Tradition: Iron Age Interrelations between Vietnam and the Philippines, 12th International Conference, September 1-5, 2008, European Association of Southeast Asian Scholars, Leiden University, Netherland.

〔図書〕（計10件）

①菊池誠一・阿部百合子編(山形眞理子)、高志書院、『海の道と考古学－インドシナ半島から日本へ』、2010、30-50.

②今村啓爾編（山形眞理子）、同成社『南海を巡る考古学』、2010、95-129.

③菊池徹夫編（山形眞理子）、同成社、『比較考古学の新地平』、2010、960-970.

④新川登亀男・高橋龍三郎編（山形眞理子）、雄山閣、『東アジアの歴史・民族・考古』アジア研究機構叢書第2巻、2009、320-354.

６．研究組織

(1)研究代表者

山形眞理子（YAMAGATA MARIKO）
昭和女子大学・国際文化研究所・研究員
研究者番号：90409582

(2)研究分担者

松村博文（MATSUMURA HIROFUMI）
札幌医科大学・医学部・准教授
研究者番号：70209617

鐘ヶ江賢二（KANEGAE KENJI）
鹿児島国際大学・博物館実習施設・実習助手
研究者番号：00389595

(3)連携研究者

田中和彦（TANAKA KAZUHIKO）
上智大学・外国語学部・講師
研究者番号：50407384

(4)研究協力者

俵寛司（TAWARA KANJI）
サイバー大学・世界遺産学部・助教
研究者番号：80463925